

漢詩の中で悲しみに打ちひしがれている自分を赤裸々に詠んでいるので、一見、そのときどの直情を書きなぐったようなものだと捉え方がしばしばなされてきたが、私はそうではないと思う。周到な準備の下、何度も何度も作品を取捨選択をして、これだけとは言う作品を三十九首選び抜き、構成し、それを紀長谷雄に託したのだと考えている。

道真の願いはただ一つ、都に帰りたいことでも、家族と会いたいことでもなく、「自分の無実」を後世の人間がわかってくれること、それだけだったのだと思う。だからこそ、最もその心情を、自分の残した詩文から読み取ってくれるであろう、その自分と同質の人間と信頼を置く紀長谷雄に託すしかなかったのではあるまいか。

私はそれが、当時の政界から一步距離を置く、紀長谷雄だったからこそ、道真の作品が後世に残ることになったのだと思う。道真にそう言う親友が一人だけではあるが、そういう友の存在そのものが、我々に取っても大きな救いのように思えてならない。

この拙著を上梓するにあたり有明広域地場産業振興支援研究助成金及び有明高専一般教育科の研究費などから出版補助金を受けたことに厚く御礼申し上げます。

また、この出版に際し原稿の入力や校正等に、前述の「道真梅の会」の会員である須藤修一・荒川美枝子諸氏及び有明高専の卒業生である松本光・竹下美海・幸田慎之介諸君の献身的な協力・支援があったことに改めて深謝申し上げます。